

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02489

研究課題名(和文) 通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり

研究課題名(英文) Crosslinguistic investigation of morphology relating to anticausativization

研究代表者

佐々木 冠 (SASAKI, Kan)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号：80312784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 逆使役化は他動詞の主語を消し去るかたちで自動詞を派生するヴォイスであり、多くの言語で再帰などの他の用法を持つ形態素の一つの用法として実現する。この研究計画では、再帰形態素によって逆使役化を実現する言語と再帰以外の形態素によって逆使役化を実現する言語および方言の分析を通して逆使役関連形態法の広がりを通言語的視点から捉えることを試みた。

このプロジェクトによってクローラによるインターネット上のデータ収集を実現することができた。同一語根を持つ自動詞と逆使役述語の意味的な差異を記述することができたほか、再帰と再帰以外の形態素を逆使役化に使う言語の両方の記述に役立つ意味地図の試作をすることができた。

研究成果の概要(英文)： Anticausativization is a voice category deriving intransitive verbs from transitive verbs by removing the transitive subject. In many languages, anticausativization is one of the functions of the reflexive marker. In this research plan, we attempted to investigate the range of anticausative morphology usage through an analysis of languages and dialects employing reflexive morphemes as well as languages and dialects employing morphemes other than the reflexive.

This project enabled us to gather anticausative related data from the internet using Crawler. The outcomes of this research project include the clarification of the semantic difference between lexical intransitive verbs and morphologically derived anticausatives sharing common verbal roots and a tentative version of a semantic map for anticausativization using not only reflexive morphemes but also non-reflexive morphemes.

研究分野：言語学

キーワード：逆使役 再帰 他動性 語彙的アスペクト 自動詞 意味地図

### 1. 研究開始当初の背景

逆使役は、他動詞文から動作主を削除するタイプのヴォイスの一種である。研究代表者が2014年度まで代表を務めていた科研「北海道および周辺地域における他動性交替と文法関係」においてさまざまな言語の研究者と研究会を開く中で、逆使役に用いられる形態法が他動詞以外の要素にも用いられることがわかった。この逸脱は特定の言語に限って現れるものではなくタイプの異なる言語にも現れるものである。

上述の逸脱を出発点として、逆使役形態法がどのような用法上の広がりや形式上の広がりを持っているかを通言的観点から追求するプロジェクトを立ち上げることとなった。

### 2. 研究の目的

逆使役形態法の用法上の広がりや形式上の広がりをはっきりとすることがこの研究プロジェクトの目標である。

用法上の広がりについては、先行研究がある。Haspelmath (2003)は再帰形態素(再帰接語や再帰接辞)の用法の広がりや意味地図を提案しており、その中には逆使役も含まれている。しかしながら、再帰形態素を使わない逆使役に関しては意味地図が提案されていない。また、再帰形態素を用いて逆使役を実現する言語においても先行研究が予測するところとは異なる可能性がある。そこで再帰形態素が逆使役用法を持つ言語としてアイヌ語、ニヴフ語、フィンランド語、リトアニア語、ルーマニア語のデータを検証し、再帰以外の形態素で逆使役を実現する言語として、日本語諸方言とモンゴル語のデータを検証することにした。

### 3. 研究の方法

逆使役関連形態素の用法の広がりについては、再帰以外の形態素をも視野に入れた新しい意味地図を作ることを目指し、前節で挙げた言語の逆使役関連形態法の用法に関する研究を進めることにした。研究会を各年度開き、研究成果を蓄積することにした。

逆使役関連形態法の形式的な広がりについては、異形態のあり方を体系的に把握するためさまざまな調査を行うことにした。面接調査およびアンケート調査と言った従来型の調査に加え、クローラによるインターネット上のデータ収集も行うことにした。

### 4. 研究成果

#### (1) 方言データを収集するサーバを稼働

初年度にクローラを走らせるサーバを研究代表者の当時の勤務校(札幌学院大学)で稼働させた。このサーバは研究代表者の転勤により2017年度から活用されていないが、2年間にわたり、北海道方言と福島方言の逆使役構文のデータを収集したほか、ルーマニア語の自動詞ベースの再帰構文のデータを収

集した。クローラによるデータ収集では、伝統方言の自発語形だけでなく、若い世代で生じた語形も収集するようにした。

2016年度までにクローラによって収集したデータは現在分析中である。また、2016年度までのノウハウを活かし、研究代表者の新しい勤務校(立命館大学)でもクローラによるデータ収集を開始する準備を始めている。

#### (2) 調査の実施

上記のクローラを使った調査はこのプロジェクトに特徴的なものであるが、面接調査・文献調査・アンケート調査といった伝統的な手法による調査も進めた。研究分担者が面接調査と文献調査でデータを収集した。研究代表者は2017年度に札幌学院大学と北海学園大学で逆使役構文のアンケート調査を行った。このアンケート調査は逆使役と意味と形式において典型からずれるデータの収集を目指したものである。

意味・用法に関しては、自発接尾辞によって派生した逆使役と語彙的自他対の自動詞の間にある意味的な違いおよび非対格自動詞に自発接尾辞が付いたものもとの自動詞の意味的な違いを明らかにすることを目指した。自発接尾辞による逆使役の方が語彙的自他対の自動詞よりも変化の瞬間を表す傾向があることがわかった。「氷が溶けている」に進行と結果状態の二つの解釈があるのに対し、「氷が溶かされている」は結果状態の解釈が強い。これは自発接尾辞による逆使役の方が変化の瞬間を表す傾向を反映したものと考えられる。また、自発接尾辞が附属した自動詞の方がもとの自動詞よりも変化の瞬間を表す傾向があることも明らかになった。

逆使役の形式に関しては、-sasar という自発接尾辞の異形態を含む自発述語が存在することが明らかになった。また、サ変動詞に関しては s-sasar-u、si-rasar-u という伝統方言の形式よりも si-sasar-u というネオ方言的な形式が好まれることがわかった。

アンケート調査の結果は、5節に示す URL で調査協力者向けに公開されたほか、佐々木(2018)でも分析の対象となった。

#### (3) 研究会の開催

当初1年に1回研究会を行うことを計画していた。2015年度は実現することができなかったが、2016年度と2017年度は研究会を行うことができた。研究会では研究代表者と研究分担者と研究協力者が逆使役構文について発表するだけでなく、同じ研究テーマで別の地域の方言を研究している若い研究者にも講演してもらった機会を作った。

2016年度にはブカレスト大学のラリーサ・アブラム氏を呼び、ルーマニア語の逆使役関連形態法に関する講演会を行った。この講演はその後の調査にも良い刺激を与えるものとなった。ルーマニア語にも自動詞に再

帰接語が附属する場合があるが、もとの自動詞と再帰接語が附属した自動詞には意味的な違いがあることがわかり、その知識は2017年度に北海道方言に関して行ったアンケート調査に活かされた。

#### (4) 出版物

5 節に示した論文と図書を出版することができた。また、研究会の内容をまとめたものを論文集として出版すべく準備を進めている。

#### <引用文献>

Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language Vol. 2: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*. 211-242. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 6件)

佐々木冠 (2018)「北海道方言における自発語形のゆれ」*KLS* 38. 205-216. 査読なし。

白岩広行 (2018)「7時間の談話資料からわかること 福島県伊達市方言の受身関連表現」『立正大学文学部論叢』141. 137-152. 査読なし。

Sasaki Kan (2016) Anticausativization in the northern dialects of Japanese. In: Taro Kageyama and Wesley Jacobsen (eds.), *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*. 183-214. Berlin: Mouton de Gruyter. 査読なし。

佐々木冠 (2016)「現代日本語における未然形」『日本語文法研究のフロンティア』庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編。21-42. くろしお出版。査読なし。

Sasaki Kan (2015) Non-universality of reflexive analysis for anticausativization: Evidence from the Hokkaido dialect of Japanese. 『札幌学院大学総合研究所紀要』2. 7-29. 査読なし。

佐々木冠・當山奈那 (2015)「日本語族における他動性交替の地域差」『有対動詞の通言語的研究』プラシャント・パルデシ・桐生和幸・ハイコ・ナロック編。43-73. くろしお出版。査読なし。

#### [学会発表](計 26件)

Sasaki Kan, Osami Okuda and Hidetoshi Shiraishi (2018) “Transitivity

alternations with productive and non-productive morphology in the languages around Hokkaido”. 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea.

Sasaki Kan (2018) “Where did the suffix-initial /s/ come from?: The story of neo-dialectal spontaneous suffix -*sasar*”. International Symposium on Japanese Studies "Tradition and Innovation in Changing Japan".

佐々木冠 (2018)「逆使役形態法の形式上の広がり:ネオ方言としての北海道方言の新しい自発接尾辞異形態-sasar」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

佐々木冠 (2018)「有対自動詞と自発接尾辞による逆使役述語の意味上の差異」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

佐久間淳一 (2018)「フィンランド語における逆使役構文」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

小林美紀・奥田統己 (2018)「アイヌ語動詞の項の増減と派生の方向」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

梅谷博之 (2018)「モンゴル語の-gdによる逆使役の特徴:種々の表現との共起関係から」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

白石英才 (2018)「ニヴフ語における逆使役構文の成立条件:現地調査結果報告」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」2017年度研究会。

佐々木冠 (2017)「北海道方言における自発語形のゆれ」関西言語学会第42回大会。

白岩広行 (2017)「日常のことばを分析する 方言研究の立場から」平成29年度立正大学国語国文学会前期大会。

Caluianu Daniela (2016) “The Romanian reflexive as a surface intransitivity marker”. 科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

奥田統己・小林美紀 (2016)「アイヌ語における逆使役の成立範囲」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

櫻井映子 (2016)「リトアニア語の再帰

形態素による自動詞派生」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

佐々木冠 (2016)「関東地方の方言における格と文法関係」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会。

佐々木冠 (2016)「北海道方言の自発構文の非正規構造」南山大学言語学ワークショップ「動詞句とその周辺」。

佐々木冠 (2016)「北海道方言自発述語のかたちの逸脱と派生の逸脱」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

佐久間淳一 (2016)「フィンランド語の再帰接辞の生産性について」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

梅谷博之 (2016)「接辞 -gd によるモンゴル語の逆使役: 語彙的アスペクトの観点から」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

白岩広行 (2016)「7時間の談話資料からわかること 福島県伊達市方言の受身関連表現について」日本語文法学会第17回大会。

白岩広行 (2016)「南東北諸方言の逆使役接辞-ar と古典語の「非情の受身」」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

- 21 白石英才 (2016)「ニヴフ語人称接辞データベース」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会。

- 22 Sasaki Kan, Osami Okuda and Hidetoshi Shiraishi (2015) “Transitivity alternation in the languages around Hokkaido”. The 17th Annual Conference of the English Department.

- 23 佐々木冠 (2015)「インターネット上の方言データ: 有効性と限界」日本語文法学会第16回大会。

- 24 佐々木冠 (2015)「北海道方言のヴォイスとアスペクト」科研費・国語研共同研究プロジェクト合同研究発表会「ヴォイス・アスペクト・格」。

〔図書〕(計 1件)

中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦 (2015)『認知類型論』くろしお出版。総ページ: 340。

〔その他〕

ホームページ等

調査協力者および地域住民への研究成果の公開・還元のため、下記の URL に札幌市近

郊の大学で行ったアンケート調査の結果を掲載した。

<http://www.ritsumeai.ac.jp/~k-sasaki/hokkaido/hk-index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 冠 (SASAKI Kan)

立命館大学・言語教育情報研究科・教授

研究者番号: 80312784

(2) 研究分担者

ダニエラ・カルヤヌ (CALUIANU Daniela)

小樽商科大学・言語センター・教授

研究者番号: 80360973

梅谷 博之 (UMETANI Hiroyuki)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・講師

研究者番号: 60515815

白岩 広行 (SHIRAIWA Hiroyuki)

立正大学・文学部・専任講師

研究者番号: 30625025

佐久間 淳一 (SAKUMA Junichi)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号: 60260585

白石 英才 (SHIRAISHI Hidetoshi)

札幌学院大学・経済学部・教授

研究者番号: 10405631

奥田 統己 (OKUDA Osami)

札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号: 60224151

(4) 研究協力者

櫻井映子 (SAKURAI Eiko)